天守を築かなかった城 鹿児島城跡



旧御本丸御楼門前之景（玉里島津家資料） 鹿児島県歴史・美術センター黎明館蔵

なぜ鹿児島城に天守が築かれなかったと考えられてきた？

鹿児島城（別名：鶴丸城）は，慶長６年（1601）頃に建てられた島津家の居城で，江戸時代の薩摩藩の政治・文化の中心でした。山城部分（城山）と麓の屋形部分（現在の黎明館あたり）からなる城で，総面積は約85ha（東京ドーム約18個分）もあります。

現在，「お城」といえば天守を思い浮べることが多いと思いますが，鹿児島城に天守はありませんでした。島津家は，77万石の大大名であるにも関わらず，「天守がない簡素な城を造った。」と言われてきました。その理由として，従来は「戦国時代の当主島津義久が，城の防御を高めるより，家来を大事にしており，「人をもって城となす」と言ったと伝わっていること」，また，「薩摩藩の武士は勇猛果敢なので城を強くする必要はなかった」，「幕府を警戒してあえて天守を造らない質素な城造りを選択した」，「実際の石高が低く，財政が厳しかったため天守を築けなかった」，「藩内に100を超える外城があったため本城を要塞化する必要がなかった」といった，様々な説が考えられてきました。

しかし，近年の調査成果で，天守を築かなかった理由が他にあることがわかってきました。



鹿児島城本丸跡の復元模型
鹿児島県歴史・美術センター黎明館常設展示室

天守のない城跡の整備を目指して

鹿児島城跡には元々天守は築かれておらず，現在においても天守を模して造られた模擬天守もありません。

しかし，鹿児島城跡には，現在の県歴史・美術センター黎明館を中心に江戸時代に様々な技術で築かれた本物の石垣が残り，城山には土塁や曲輪，切岸など山城としての防御施設が残っています。

鹿児島県では，鹿児島市とともにこうした本物の文化財を保存・活用する取組を進めています。是非本物の城跡を見て，鹿児島の歴史や文化に触れてください。



本丸跡北東側の隅欠



御楼門周辺の西南戦争の銃弾痕・砲弾痕が残る石垣



御楼門周辺の金刃取り残し積・目地漆喰が残る石垣

本リーフレットは，文化庁の補助金「地域の特色ある埋蔵文化財活用事業費」を活用して開催した「御楼門開門５周年記念・鹿児島城跡シンポジウム～天守のない城から天守を考える～（令和７年９月）」の発表内容をもとに作成したものです。

南の宝箱 鹿児島

鹿児島県観光・文化スポーツ部　文化振興課

2026年3月刊行

天守とは？

高くそびえる「天守」は，現在，各地に残る城のシンボルとなっています。天守は諸説ありますが，永禄12年（1569）に織田信長が室町幕府第15代将軍足利義昭のために造営した二条城で建設されたものが最初と言われています。

織田信長が安土城に築いて以降，石垣を備え天守がそびえる城は，鎌倉時代から続く守護や戦国大名などの出身ではない新興の織豊政権（織田家，豊臣家）が，新たな支配の正当性・権威を主張する「見せる城」として重要な位置を占めるようになりました。

それは徳川幕府が開かれた江戸時代にも引き継がれます。

各地の「お城」に築かれる天守

江戸時代から現代まで残っている「天守」は，姫路城跡や彦根城跡など全国で12か所しかありません。それ以外の「天守」は，すべて明治時代以降に築かれたものです。これらの天守は，昭和時代には観光目的や太平洋戦争後の復興の象徴として築かれたようです。また，焼失を防ぐためにコンクリート製が多く，元の姿に基づいたものではなかったり，江戸時代には天守を築かなかった城にまで築かれたりしています。

しかし，平成時代以降になると，古写真や絵図を基に史実や当時の技術による木造の天守が復元されるようになりました。また，今後復元を目指している天守もあります。



江戸時代から現存する姫路城跡の天守



江戸時代から現存する丸亀城跡の天守



復元された名古屋城跡の天守
（令和7年度 第21回全国城跡等石垣整備調査研究会にて撮影）



復元された岐阜城跡の天守

天守がない城とは？

江戸時代，すべての城で天守を築いたわけではありません。鹿児島城以外では，伊達家の仙台城（宮城県），伊東家の飫肥城（宮崎県），相良家の人吉城（熊本県）などがあります。これらの城には，「元々天守がない」ことと，「鎌倉時代から続く大名の城である」という共通点があります。

また，江戸城（東京都）や鍋島家の佐賀城（佐賀県）など，天守が火災等で失われた後，天守を再建しなかった城もあります。それには，各藩の経済的な事情や，江戸時代中期以降は各大名の権力基盤が安定し，権力をアピールする必要がなくなったという事情があるようです。「天守こそが城である」というイメージは，明治時代以降に各地で復元された天守を見慣れた現代の感覚なのかもしれません。



天守を再建しなかった佐賀城跡天守台の石垣

天守を築かなかった島津家の城造りとは？

島津家は，文禄・慶長の役の際に日本軍が築いた倭城の一つである泗川倭城（韓国慶尚南道泗川市，天守や石垣を備えていた）での明・朝鮮軍との「泗川の戦い」で勝利しています。また，島津家の分家の佐土原藩では，慶長16年（1611）に築いたとされる天守がありました。島津家は，天守の有効性を理解しており，その建築技術をもっていたと考えられます。しかし，鹿児島城に天守を築くことはありませんでした。

室町時代までは，平時は麓の屋形に住み，戦時に山城に詰めることが一般的でした。特に，地方の有力大名は，自分の領地に都（京）の将軍家の御所と同じような屋形を造ることで権威を示していたようです。

鎌倉時代から続く島津家は，伝統的な武家の作法や格式を重んじ，室町将軍の御所を意識した屋形造りに山城を持つ城造りを採用したと考えられます。

言い換えれば，島津家には，新興の織豊政権によって生み出された「天守」は必要なかったと考えられます。



「鹿児島城下絵図屏風」（玉里島津家資料）
鹿児島県歴史・美術センター黎明館蔵を一部改変
（※青線の範囲が鹿児島城）